

【論文】

他者が存在する状況で生じる孤独感への態度に関する研究

小笠原幹子 (岩手大学大学院総合科学研究科)

奥野雅子 (岩手大学人文社会科学部)

I. はじめに

集団の中にいるにもかかわらず孤独感を抱いた経験はないだろうか。「孤独」の辞書的定義において孤独(状態)と孤独感(感情)が混在しているという指摘や定義そのものにネガティブな解釈が含まれやすいという指摘がなされている(山田・上山, 2017)。そのため孤独感は一人在る時に抱く感情というイメージを持つ者もいるだろう。しかし、本来状態と感情は別概念であり、孤独感是他者とともに過ごしている際にも抱く可能性があるといえる。また、青年期は、友人との関係性を強化しながら“自分らしさ”を模索する時期であり、そこで生じる葛藤により孤独感を体験しやすい(清水・清水・川邊, 2015)。また、青年期における孤独感は疎外感や不安感等と併存する日常的な生活感情であり(落合, 1989)、孤独感との付き合い方は青年期において重要なテーマである。そこで本研究では、他者が存在するにもかかわらず孤独感を感じる状況に焦点を当て、その状況に対する認知や行動との関連を検討する。また、精神的健康への影響を確認することで、より適切な認知や行動を明らかにすることを目的とする。

II. 問題と目的

Peplau & Perlman (1979) は孤独感を「今ある社会的ネットワークが、本人の望むよりも小さいあるいは満足度が低い場合に存在するもの」と定義しており、いわば理想と現実との差異によるものと考えられている。性格特性における神経質や抑うつ性との正の相関、充実感や自尊心との負の相関(宮下・細川, 1991)が示されている他、生活満足度(Salimi, 2011)や生きがい感(大林・伊藤・横田, 2007)、セルフモニタリング傾向との負の相関(諸井, 1987)、社会的不安傾向との正の相関(諸井, 1987)などが示されており、孤独感には精神的健康にネガティブな影響を与えるものと考えられている。さらに、相川・佐藤・佐藤・高山(1993)は、孤独感の高い者は対人コミュニケーションにおける自己表現スキルや会話維持スキルが低い傾向にあることや、話者としての自己評定、さらには相手の会話力や魅力度までを低く評定してしまうことを示唆している。これについては、孤独感が高い者はその否定的認知によって、Peplau & Perlman (1979) による孤独感の定義における達成レベルを低く見積もってしまうために願望レベルとの差異が増幅するという、孤独感を強める認知スタイルを持っていると考察されている。以上のように、孤独感の程度は認知や行動に大きく影響を与えるものと考えられる。

一方で、孤独感そのものの程度ではなく、孤独感あるいは孤独状態をどのように捉えるかによって、精神的健康への影響に変化が生じることも示唆されてきた。宮下・細川(1991)

は孤独感の受容度と充実感、自尊心との間に正の相関があること、性格特性における神経質・抑うつ性との間に負の相関があることを報告している。また、大東・岩元（2009）は、孤独に対する捉え方には「否定的評価」「自己成長機能」「肯定的評価」の3つがあることを示しており、捉え方が肯定的である場合は自尊心や自我同一性が高く、抑うつが低い傾向にあることを示唆している。加えて、孤独感が高くても、肯定的評価が高ければ友人との摩擦的出来事によるストレスが軽減される可能性があることも示唆されており（清水・清水・川邊，2015）、適切な認知ができれば精神的健康を維持することができるといえる。

さらに、孤独感への対処行動による影響についても指摘されている。諸井（1989）は、孤独感を抱いた際に友人との交流や自己開示など、友人関係を利用した対処を行うことで孤独感が低減されることを明らかにした。一方で、一人で落ち込むなどの消極的受容方略は孤独感の長期化をもたらすことも示唆している。このことから、適切な対処行動を選択することで精神的健康は保つことができると考えられる。

ただし、孤独という状態と孤独感という感情はしばしば混在しており（山田・上山，2017）、状態と感情を明確に区別した孤独感研究は数少ない。また、他者が存在する状況に焦点を当てた孤独感研究は殆ど見当たらない。そこで本研究では、他者が存在する状況での孤独感に注目し、それに対する認知や対処行動との関連、及び精神的健康との関連を明らかにすることによって、有用な認知・行動について検討することを目的とする。なお、本研究では孤独感を「個人が経験している社会的関係（達成レベル）が自身の望む社会的関係（願望レベル）よりも小さいあるいは満足度が低い場合に生じる感情で、寂しさを伴う体験によって対人関係的に不満な感情」と定義する。また、状態と感情を明確に区別するために、孤独という状態を「他者と会わずに、あるいは会うことができずに一人でいる状態」と定義し、本研究においては孤独状態と表記を統一する。

Ⅲ. 予備調査

1. 方法

(1) 目的

他者が存在するにもかかわらず孤独感が生じる具体的状況やその状況に対する認知、状況下での対処の実際を把握すること。

(2) 調査対象者

大学生 68 名（有効回答数 58、男性 39 名、女性 28 名、その他 1 名）の回答を得た。

(3) 調査時期

2021 年 9 月に調査を実施した。

(4) 手続き

Google フォームにて作成した質問紙に回答を求めた。なお、集計されたデータは統計的に処理され研究の目的以外には一切使用しないこと、途中で回答を止めても一切不利益がないことなどを質問紙冒頭で確認し、同意した対象者のみに回答を求めた。

(5) Google フォームの構成

①フェイスシート（年齢・性別）

- ①他者が存在する状況で孤独感を感じた経験の有無（5 件法）
- ②誰と過ごしている時に孤独感を感じたのか（複数選択可）
- ③他者が存在する状況で孤独感を感じた時期（複数選択可）
- ④他者と共に過ごしているにもかかわらず孤独感を感じる具体的状況（自由記述）
- ⑤他者と共に過ごしているにもかかわらず孤独感を感じる状況に対する認知（自由記述）
- ⑥他者と共に過ごしているにもかかわらず孤独感を感じる状況での対処（自由記述）

(6) 分析

他者が存在するにもかかわらず孤独感を感じる具体的状況、状況に対する認知、状況下での対処について KJ 法での分類の後、質問項目を作成した。

2. 結果

項目 1 において、他者と共に過ごしている際に孤独感を感じた経験が「全くない」と回答したのは 10 名で、他 58 名は他者が存在する状況で孤独感を感じたことがあるという結果であった。また、項目 2 では「友人」と過ごしている際に孤独感を感じたという回答が最も多かったため、本調査では共に過ごす他者に友人を想定することにした。加えて項目 3 の結果からは、中学以前から新型コロナウイルスの感染拡大が進んだ 2021 年 9 月時点まで、時期にかかわらず孤独感を経験していることが明らかとなったため、本調査では時期の特定は行わないことにした。

Ⅲ. 本調査

1. 方法

(1) 目的

友人と共に過ごしている状況で感じる孤独感が、その後の認知や行動に与える影響を明らかにすること。また、認知や行動と友人関係が双方向的に与える影響を明らかにする。

(2) 調査対象者

専門学生・大学生・大学院生 221 名（有効回答数 221、男性 94 名、女性 125 名、その他 2 名）の回答を得た。平均年齢は 20.90 歳（SD=1.21）であった。

(3) 調査時期

2021 年 12 月に実施した。

(4) 手続き

Google フォームにて作成した質問紙に回答を求めた。なお、集計されたデータは統計的に処理され研究の目的以外には一切使用しないこと、途中で回答を止めても一切不利益がないことなどを質問紙冒頭で確認し、同意した対象者のみ回答を求めた。

(5) Google フォームの構成

①フェイスシート（年齢・性別）

① 友人と過ごしているにもかかわらず孤独感を感じる状況での孤独感の程度（予備調査により作成した 27 項目 6 件法）

②孤独感を感じる状況における認知の程度（予備調査により 39 項目 6 件法）

③孤独感を感じる状況での対処（予備調査により 37 項目 6 件法）

④友人関係満足感尺度（加藤, 2001）（1 因子 6 項目 6 件法）

⑤友人に対する欲求尺度（榎本, 2000）（「相互尊重欲求」「親和欲求」「同調欲求」の 3 因子構造、全 45 項目のうち、各因子の因子負荷量上位 4 項目、計 12 項目を採用し 6 件法）。

(6) 分析

友人と過ごしているにもかかわらず孤独感を感じる状況、状況に対する認知、状況下での対処に関する各項目について因子分析を行った。その後、仮説モデル図（図 1）に基づきステップワイズ法による重回帰分析を行い、その結果を基に共分散構造分析によりモデルの構造を試みた。

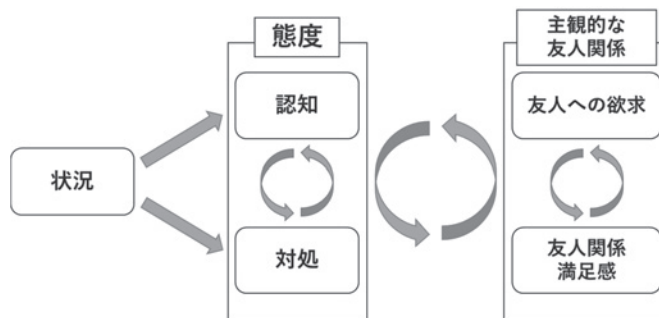


図 1 仮説モデル図

2. 結果

(1) 孤独感を感じる具体的状況・認知・対処についての因子分析

まず友人と過ごしているにもかかわらず孤独感を感じる具体的状況に関する 27 項目のうち、天井効果がみられた 1 項目、フロア効果がみられた 1 項目、因子負荷量が不十分であった 8 項目を除いた計 17 項目に対して、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。その結果 3 因子が抽出された。第 1 因子は、共に過ごす友人と考え方や状況などが異なり、向いている方向が違うことに孤独感を抱いている様子から「認識交錯状況」と命名した。また第 2 因子は一緒にいる友人と自分とを比較し、自身が劣勢であることに対して孤独感を抱いている様子から「他者比較状況」と命名した。そして第 3 因子は複数の友人がいる場で取り残されている様子から「疎外状況」と命名した。これらの結果を表 1 に示す。

次に、友人と過ごしているにもかかわらず孤独感を感じる状況に対する認知に関する 39 項目のうち、天井効果がみられた 1 項目、因子負荷量が不十分であった 15 項目を除いた計 23 項目に対して、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、3 因子が抽出された。第 1 因子は友人に対して自身の気持ちや考えの理解を求め、満たされず焦がれているイメージから「理解希求」と命名した。また第 2 因子は孤独感を感じる状況から距離を置いたり、変化を起こすことを諦めたりしている印象を受け「逃避・諦観」と

命名した。そして第3因子は自分自身の考え方や行動を変化させようとするなど前向きな認知であることから「行動変容動機」と命名した。これらの結果を表2に示す。

さらに、友人と過ごしているにもかかわらず孤独感を感じる状況における対処に関する37項目のうち、天井効果がみられた5項目とフロア効果がみられた2項目、因子負荷量が不十分であった11項目を除いた計19項目に対して、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。その結果4因子が抽出された。第1因子は自身にとって居心地のよい場・時間となるよう自発的に行動する様子から「能動的対処」と命名した。第2因子は行動的対処に移すことができずネガティブな認知に留まっている様子から「否定的認知への膠着」と命名した。第3因子はその場での積極的かかわりは行わず暇を潰している印象から「回避的対処」と命名した。そして第4因子は主張的な言動はせず周りに合わせることでその場でのかかわりを維持する様子から「調和的対処」と命名した。これらの結果を表3に示す。

表1 孤独感を感じる状況についての因子分析（主因子法プロマックス回転）

No.	項目	I	II	III
認識交錯状況 $\alpha = .786$				
3	友人に、自分の言いたいことが伝わらない時	.633	-.147	.024
11	一緒にいる友人に時間的・精神的余裕がなさそうで話せない時	.606	.112	-.161
20	気まずい状態の友人と行動を共にする時	.577	-.075	.145
27	友人との趣味嗜好の違いを感じた時	.571	.219	-.061
16	友人と話が続きず途切れてしまった時	.546	.082	.112
17	人に共有できない悩みを抱えている状態で、友人と一緒にいる時	.532	-.077	.186
22	友人との価値観の違いを感じた時	.461	.177	-.097
他者比較状況 $\alpha = .767$				
1	自分がわからない話題で友人たちが盛り上がっている時	-.243	.666	.150
10	自分と友人との関係性が、自分以外との関係性よりも浅いと感じる時	.101	.638	-.040
2	友人が、自分以外の人と仲良くしているのを見た時	.112	.525	.013
25	周囲の友人が自分よりも楽しそうに見える時	.067	.524	.133
4	課題等の進捗が自分だけ遅れている時	.145	.499	-.090
9	周囲が盛り上がっている中で、自分がしなければならない作業をしている時	.066	.393	.141
疎外状況 $\alpha = .733$				
7	周囲のテンションについていけない時	-.119	.175	.690
18	その場での自分の役割を見つけれられない時	.196	-.121	.636
21	友人たちと話している際に、自分だけ目を見てもらえない時	.072	-.015	.569
23	自分以外の人の発言・意見だけで話が進んでいる時	-.085	.187	.512
因子相関行列		I	II	III
		I	.534	.410
		II		.613
		III		

表 2 孤独感を感じる状況に対する認知についての因子分析（主因子法プロマックス回転）

No.	項目	I	II	III
理解希求 $\alpha=.843$				
31	自分も一緒に盛り上げられるようにしてほしいと思う。	.889	-.165	-.141
48	その友人に自分の気持ちをわかってほしいと感じる。	.781	-.175	-.013
33	その友人に意識されたいと感じる。	.642	-.139	.166
57	その友人に対して周りが見えないのかなと感じる。	.566	-.036	-.140
61	悲しい。	.563	.252	.037
52	つまらない。	.534	.142	-.069
59	その状況が早く終わってほしいと思う。	.500	.298	.028
39	その友人に必要とされたいと感じる。	.474	.083	.188
46	他の友人に会いたくなる。	.405	.108	-.036
逃避・諦観 $\alpha=.846$				
42	その場から離れたいと感じる。	.152	.658	-.029
36	自分に自信が無くなる。	.033	.649	.126
58	具体的な解決方法があっても、自分には実行できないと思う。	-.148	.643	-.165
56	稀なことではない。	-.138	.641	.007
45	自分が集団から浮いていると感じる。	.021	.629	.155
65	一人になりたいと感じる。	.009	.609	-.065
41	消えてしまいたくなる。	.209	.562	-.065
54	自分がそこにいる意味がわからなくなる。	.245	.559	-.034
30	具体的な解決方法はないと思う。	-.116	.498	-.061
行動変容動機 $\alpha=.686$				
53	自分を変えたい、変わりたいと思う。	-.014	.143	.674
64	そこにいる友人を受け入れられるようにしたいと思う。	-.161	-.016	.619
62	具体的な解決方法を探し、実行したいと思う。	.228	-.266	.609
55	自分を見つめ直す時間ができたと感じる。	-.038	-.177	.548
51	自分も無意識のうちに他者を傷つけてしまっているかもしれないと考える。	-.184	.278	.414
因子相関行列		I	II	III
		I	.586	.399
		II		.322
		III		

(2) 各状況での孤独感の程度と認知、対処、主観的友人関係との関連について

まず、共分散構造分析の予備分析として、各状況での孤独感の程度と認知、対処、友人への欲求、友人関係満足感の関連を検討するためにステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、仮説モデル図（図 1）で想定した全てのパスが確認されたため、共分散構造分析でも同じモデル図を基礎とした。

Amos を用いて、友人と過ごす状況での孤独感の程度、友人と過ごしているにもかかわらず孤独感を感じる状況に対する認知、対処、友人への欲求、友人関係満足感の関連モデルの構造を試みた。その結果を図 2 に示す。

なお、モデル構造にあたり「否定的認知への膠着」を削除、「回避的対処」「調和的対処」を状況改善に消極的で本心を出さない様子から「忍従的対処」として統合し、また「親和欲求」「同調欲求」を友人に自身と同様の行動や考えを求める様子から「同一性欲求」として統合した。モデルの各適合度指標は $\chi^2(30)=64.497(p=.000)$ 、GFI=.950、AGFI=.891、CFI=.952、NFI=.917、RMSEA=.072、AIC=136.497 であった。

表3 孤独感を感じる状況下での対処についての因子分析（最尤法プロマックス回転）

No.	項目	I	II	III	IV
能動的対処 $\alpha=.786$					
96	さりげなく違う話題にする。	.789	.113	.124	-.131
77	一緒に何かしようと新たに提案する。	.739	-.013	-.125	-.180
84	友人を笑わせるような言動をする。	.583	-.071	-.073	.070
91	話しかける、会話に入ろうとする。	.563	-.191	-.073	.029
101	オーバーリアクションをする。	.561	.088	-.015	.141
94	自分の役割を見つける。	.483	-.130	.042	.281
78	自分と向き合う、対話をする。	.431	.272	.055	.070
88	自分が必要とされそうな別の場所に行く。	.407	.218	.162	-.049
否定的認知への膠着 $\alpha=.711$					
92	その場でネガティブなことを考えてしまう。	.000	.771	-.020	.053
99	その場で考え込んでしまう。	.183	.702	.092	.018
90	気にしない。▲	.117	-.653	.288	.117
回避的対処 $\alpha=.668$					
100	ボーッとする。	-.050	-.006	.648	.021
74	別のことを考える。	-.010	-.036	.638	.051
87	無心になる。	-.186	.182	.555	.169
80	その場で他のことをして時間を潰す（読書、テレビを観る、音楽を聴くなど）。	.222	-.115	.475	-.234
72	その場でスマホを見る。	.008	-.171	.472	-.081
調和的対処 $\alpha=.675$					
85	リアクションや意見を周りに合わせる。	.042	.094	-.095	.689
89	周りの空気に溶け込む。	-.097	-.051	.115	.686
82	話をよく聴き理解する。	.283	-.097	-.151	.505
因子相関行列					
	I	II	III	IV	
		-.073	-.055	-.265	
			.325	-.008	
				-.058	
					IV

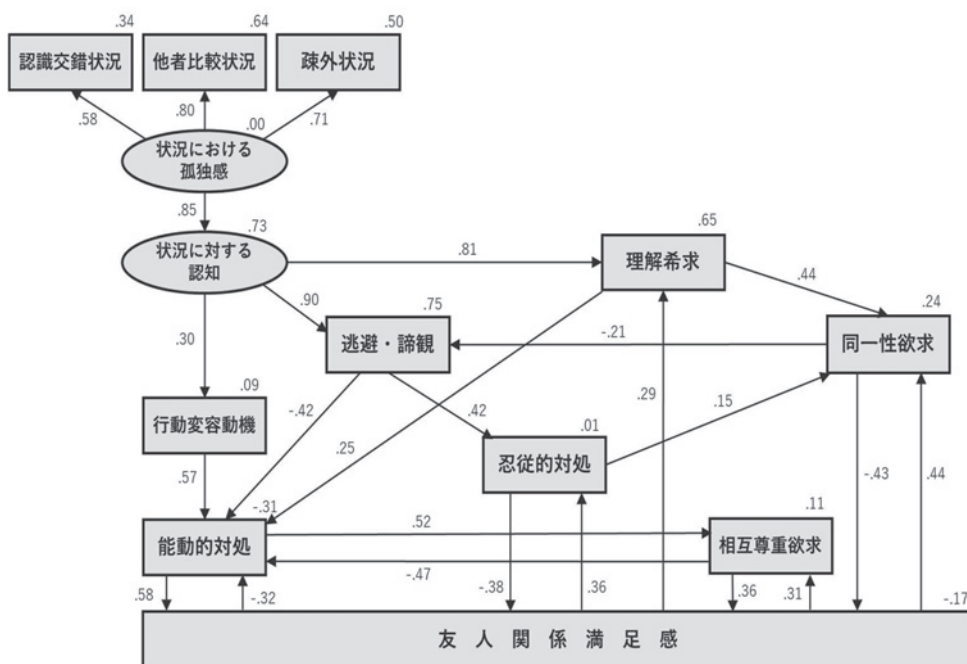


図2 共分散構造分析によって得られた最終モデル
(図が煩雑になるため誤差変数を省略して図示)

IV. 考察

関連モデルの検討の結果、「友人と過ごす状況での孤独感」は「状況に対する認知」に直接影響を与えていることが明らかとなった。また、認知と対処については認知から対処への影響のみが認められた。このことから、孤独感を感じた際は、まずその状況を認知し、それによって対処方略を決定していることが示唆される。

ここからは、どのような認知がどのような対処、友人への欲求、及び友人関係満足感に関連しているのかをみていく。まず、「状況に対する認知」からのパス係数が最も大きい「逃避・諦観」からは、「忍従的対処」への正の影響、「能動的対処」への負の影響が示されている。すなわち、孤独感を抱く状況に対して消極的な認知である逃避・諦観が強くなるほど、友人への積極的なかわりは抑制され、その場しのぎの「忍従的対処」を使用する傾向にあると読み取れる。また、「忍従的対処」から「友人関係満足感」に対して負の影響が認められることから、「忍従的対処」は友人関係に対する満足感を低下させてしまう可能性が示唆された。孤独感を感じている際に状況改善を試みず“耐える”という選択をしてしまうと、状況が過ぎ去った後も孤独感や不満感、不安感などの低減が見込めないため、友人関係満足感を低下させてしまうことが推察される。一方、認知のうちの「行動変容動機」から「能動的対処」へ、「能動的対処」から「友人関係満足感」への正の影響が示された。このことから、孤独感を通して自身の在り方を省み状況改善を図る「行動変容動機」が強まると、自身の理想の友人関係に近づけるため「能動的対処」を使用し、その結果、友人関係満足感が高まることが考えられる。ただし、「友人関係満足感」は「能動的対処」に負の影響を、「忍従的対処」に正の影響を及ぼし、「忍従的対処」は「友人関係満足感」に負の影響を及ぼしている。友人関係満足感が向上すると、現状の関係性を維持しようと孤独感に耐える「忍従的対処」の使用頻度が高まってしまい、それが結果として友人関係満足感を低めてしまうことが読み取れる。そして、友人関係満足感の低下を自覚した際には、その改善のために「能動的対処」を使用するようになるという円環的関連を読み取ることができる。これは友人関係を築く中で生じるゆらぎを表しているのではないかと推察される。加えて、「理解希求」は「能動的対処」に正の影響を及ぼしており、理解してほしいという明確な理想が、友人とのかわり方の積極的变化につながった結果であると推察される。一方で「理解希求」は、「友人関係満足感」に負の影響を及ぼす「同一性欲求」にも正の影響を及ぼしている。理解されたいという思いが、友人との行動・考えの一致に対するこだわりにつながってしまった場合には、友人関係満足感に対して間接的に負の影響を与えると考えられる。

V. 総合考察

1. 本研究の成果と意義

本研究では「他者が存在する状況で生じる孤独感」に焦点を当てたことで、友人と過ごしているにもかかわらず孤独感を抱く状況、それに対する認知及び対処の多様性が示された。これにより、友人と共に過ごしているにもかかわらず孤独感を感じるという複雑な心境において、自身がなぜ、どんな部分に孤独感を感じているのかを整理する際に役立つと考えられる。また、認知及び対処についても、無意識的に決定されている自身の認知や対処につい

て俯瞰的に分析したり、否定的認知から脱却したりすることの一助になると考えられる。さらに、共分散構造分析の結果より、友人と過ごす孤独感状況においては、その体験を通して自己を省みる、あるいは理解してほしいという願望をポジティブに変換し、積極的な対処を行うことで友人関係満足感が向上することが示唆された。加えて友人関係構築におけるゆらぎが表れた円環的な関連も示唆され、双方向の関連を想定したことによる新たな知見が得られたといえる。

2. 日常への示唆

友人と共に過ごしているにもかかわらず孤独感を感じた際には、そのような状況を変化させたい、あるいは自身の気持ちを分かってほしいと考え、自身の望む友人関係に近づけるための積極的な対処を行うことが重要である。しかし、友人と共に過ごしている際に孤独感を感じた場合の認知は自動的・無意識的に行われているものであるため、意識的にコントロールすることは困難を極める。そのため、認知自体の変化を試みるのではなく、まずは自身の孤独感の要因や認知・対処の傾向を知り、孤独感を抱く自分を認めることから始めることを提案したい。また、対処は認知と比較して意識的に変化させやすいため、自身の望む友人関係に近づけるよう積極的な働きかけを試みることで、自身の理想と現実とのギャップが小さくなり、友人関係満足感を向上させることができると考えられる。孤独感を感じている中での自己分析や能動的対処は容易ではないが、経験の積み重ねにより次第に意識しなくても行うことが可能となり、ひいては孤独感そのものや孤独感を抱く自己を受容することができるようになるのではないだろうか。

3. 本研究の限界と展望

本研究では予備調査の結果から、共に過ごす他者に友人を想定した。しかし、共に過ごす他者には友人の他に家族や恋人、先輩後輩なども考えられ、想定する他者の違いによって孤独感を感じる状況やそれに対する認知、対処が異なると予想される。そのため、異なる関係性の他者を想定した調査を行うことで「他者が存在する状況で生じる孤独感」の様相をより詳細に明らかにすることができると考えられる。加えて、本研究では研究デザイン及び質問項目数の関係で採用しなかった既存の孤独感尺度等を組み合わせることで、より精度の高い孤独感研究が可能であるといえる。

また、本研究では友人の定義を行わなかった。友人の親密度などを限定してしまうことで孤独感の程度や認知、対処に差異が生じなくなることを危惧したための決定であったが、回答者によってその捉え方が異なり、結果に影響した可能性がある。そのため、友人に「親密度に関係なく、行動を共にすることの多い者」を想定できるような条件設定も選択肢のひとつとして考えられる。さらに、本研究では、精度の高いモデル適合度を提示することができなかったため、本モデルは推測として提示する。今後はより精緻化したモデルの構造を試みるため、さらに状況を限定して検討を継続する必要がある。加えて、累積した知見を援用し、青年期の孤独感への援助についての事例研究を行うことが求められるだろう。

<引用文献>

- 相川充・佐藤正二・佐藤容子・高山巖 (1993). 孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究：孤独感と社会的スキルとの関係 社会心理学研究, 8(1), 44-55.
- Azimeh Salimi (2011). Social-Emotional Loneliness and Life Satisfaction. *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, 29, 292-295.
- 大東美穂子・岩元澄子 (2009). 青年の孤独に対する捉え方—孤独感、自己意識、精神的健康、自我同一性との関連— 久留米大学心理学研究, 8, 75-84.
- 宮下一博・細川あゆみ (1991). 孤独感と性格・適応及び対処方略との関係 千葉大学教育学部研究紀要, 41(1), 33-38.
- 諸井克英 (1987). 大学生における孤独感と自己意識 実験社会心理学研究, 26(2), 151-161.
- 諸井克英 (1989). 大学生における孤独感と対処方略 実験社会心理学研究, 29(2), 141-151.
- 大林由佳・伊藤菜穂子・横田正夫 (2007). 青年期における生きがい感と抑うつ・孤独感・幸福感との関連について 日本心理学会大会発表論文集, 日本心理学会第 71 回大会公益社団法人日本心理学会.
- 落合良行 (1989). 青年期における孤独感の構造 風間書房
- Peplau, L. A. & Perlman, D. (1979). *Blueprint for a social psychological theory of loneliness*. In M. Cook & G. Wilson (Eds.), *Love and attraction*, 101-110. Oxford, England: Pergamon Press.
- 清水健司・清水寿代・川邊浩史 (2015). 孤独感および孤独に対する捉え方が友人関係に及ぼす影響 信州大学人文科学論集, 107-117.
- 山田斗志希・上山輝 (2017). メディア表現における「孤独」と「孤独感」に関する考察 富山大学人間発達科学部紀要, 11(2), 89-101.